パリ通信・第160号

アルテミジア・ジェンテイレスキ

パリは4月に入り例年になく高温が続き、「復活祭」(今年は4月20日)を待たずに街路樹の新芽が開き、桜、ライラック、椿などの花々が咲いて春爛漫だ。学校関係は11日(金)夜から2週間の復活祭休暇に入り、多くの人が動く観光シーズンが始まった。

4月は展覧会の時期でもあり、ブーローニュの森にある「ルイ・ヴイトン財団」ではイギリスの現存画家デイヴィッド・ホックニー(1937-)の春に相応しい色とりどりの作品展示(4月9日から8月31日まで)が始まり、フランス・ノルマンディー地方を描いた作品を中心に400点近い展示で楽しみである。

その前に、パリ8区ジャック・マール・アンドレ美術館で一足早く始まった「アルテミジア・ジェンテイレスキ展」(3月19日から8月3日まで)に行った。

アルテミジア・ジェンテイレスキ(1593-1656)はオラツイオ・ジェンテイレスキ(1563-1639)の第一子としてローマで生まれる。父オラツイオはフィレンツェ生まれでトスカーナ後期マニエリス最後の画家で、ピサからローマへ移り80年後半にはヴァチカンの装飾にも招聘される。ローマでカラヴァッジョと出会い交友関係を結びその影響を受けた人だ。ローマからファヴリアーノ、アンコーナへ移動し、1624年にはパリに呼ばれる。メディチ家出身マリー・ド・メディチ(1575-1642)がフランス王アンリ4世の妃、ルイ13世の母としてフランス宮廷に君臨し、フィレンツェに縁の深いオラツイオがフランス宮廷画家となる。短いパリ滞在ではあるがリュクサンブール宮の装飾、フォンテヌブロー派を思わせる「狩りの女神デイアナ」(フランス・ナント美術館所蔵) (写真左) などを残している。伝統的に空の三日月、猟犬グレーハウンド、弓と一緒に描かれる女神デイアナであるが、頭の大きさに対して全身が長すぎるマニエリスム特有の縦に細長い美しい絵である。1626年戴冠したばかりのイングランド国王チャールズ1世に宮廷画家として招聘されたオラツイオは、息子3人を連れてロンドンに渡り1639年ロンドンで生涯を閉じる。

娘アルテミジアは父の工房で育ち、画家として類稀な才

能を認めた父オラツイオは一番弟子として娘に絵を教える。父親か夫の庇護がなければ絵を学ぶことも職業として選ぶこともできない時代である。父オラツイオの絵を見て、父の画風を身につけ、10代で父を超えるまでに成長する。今回展示されている「スザンナと長老たち」(1610)(170x119cm)(ドイツ、ポメルスフェルデン所蔵)（写真右）はアルテミジア17歳の作品である。

旧約聖書エステル記を題材にした「エステルとアハシュエロス王」(1628頃)(208 x 274cm)(ニューヨーク・メトロポリタン美術館所蔵)（写真下）は父を凌駕する大作である。不幸なことに1611年アルテミジアは父親の友人でアトリエを共有する画家アゴステーノ・タッシの性的暴力を受ける。オラツイオは娘をタッシに嫁がせるつもりではあったがこの事件は1612年春から秋までかかる裁判へと発展した。裁判には勝訴したものの今日の裁判からは程遠くタッシは法皇の保護でローマ追放の判決を実行されることもなく、アルテミジアに大きな傷を残した。この強姦事件を機にアルテミジアは別の画家と結婚しフィレンツェに活動の場を移した。父親のもとを離れ一人の画家として名を成していくが、ローマで知った父親の友人カラヴァッジョとの出会いがアルテミジアの画風を確固たるものにする。旧約聖書ユディイット記に登場する美しいユダヤ人ユディイットはベトリアの町を包囲したアッシリア軍を前に、死を覚悟して敵地に向いホロフェルネス将軍の首を斬り、町を解放へと導く。17世紀に好んで描かれた題材でカラヴァッジョ「ユディイットとホロフェルネス」(1598)を手本にアルテミジア「ホロフェルネスの首を斬るユディイット」(1612-1614)(ナポリ・カポディモンテ美術館所蔵)（写真右）が描かれる。

「ユデイットと召使い」(1615頃)(ウフィッツイ美術館所蔵)とともにカラヴァッジョの技法を受け継いだ傑作である。エステルやジュデイットはユダヤの民を守るために死も畏れぬ勇敢な女性たちである。「女性に何ができるかを示すために私は描く」と手紙に残しているように、オラツイオの娘として、またカラヴァッジョの後継者として強い女性を描き続けたアルテミジアは登場人物と変わらぬ強い女性であったに違いない。